

不定詞補部と動名詞補部の認知構造について

濱 田 英 人

0. はじめに

不定詞と動名詞は共に文中において主語や目的語として機能し得るなど統語的な類似性があるものの、述語動詞の意味的差異によってどちらを主語あるいは目的語として取るかに関して違いがみられることはよく知られている。たとえば、Kiparsky and Kiparsky (1971) は *factive predicates* (叙實的述語) は動名詞を主語や目的語に取るのに対して、*non-factive predicates* (非叙實的述語) は主語や目的語に不定詞を取ると主張している。

- (1) a. His being found guilty is tragic.
b. *His being found guilty is likely. (Kiparsky and Kiparsky 1971: 346)
- (2) a. He enjoyed being the world expert on their language.
b. *He enjoyed to be the world expert on their language.
- (3) a. *He claims being the world expert on their language.
b. He claims to be the world expert on their language.

(Hudson 1971: 107)

確かに、このことは動名詞と不定詞のもつ性質の一部を捉えていると言える。しかし、このことですべてを説明できないことは Kiparsky and Kiparsky (1971) でもすでに指摘されており、たとえば、(4)に示されるように *avoid* はその補部の真を前提とする述語ではなく、従って *non-factive* であるが、目的語として動名詞をとり、不定詞補部とは共起しない。

- (4) a. I avoid crossing the street if I am in a hurry.
b. *I avoid to cross the street if I am in a hurry.

また、次の(5)では非叙実的述語が動名詞補部をとっており、しかもその補部によって記述されている出来事は叙実性 (factuality) をもたない。

- (5) a. She recommends buying the big tins.
b. He suggested reading the instructions first.
c. John advised consulting a lawyer.

更に、不定詞が一般的に未来指向的であることはよく指摘されるところであるが、このことが必ずしも正しくないことは次の(6)のような卑近な例からも明らかであり、この場合不定詞補部は叙実性を有している。

- (6) Lacy ceased to cry when she heard her parents come in the door.

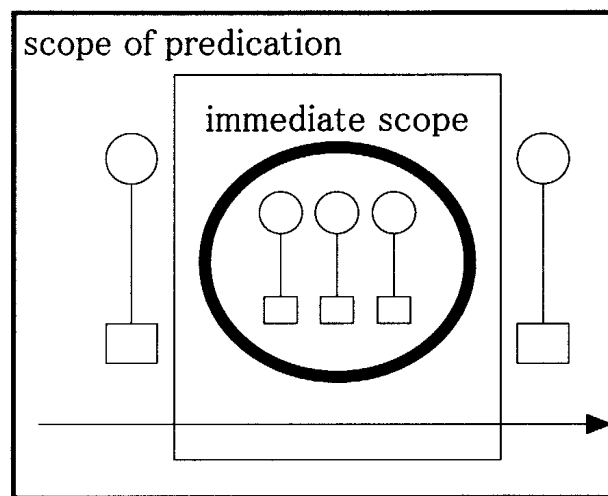
小稿の目的は不定詞補部と動名詞補部のそれぞれのもつ性質について考察し、特定の述語がその補部としてなぜ不定詞節あるいは動名詞節を要求するのか、また、述語が両方の補部と共起可能な場合の微妙な意味的差異が何に起因するのかという問題を主語と補部の間的心灵的接触 (mental contact) における抽象的レベルでの非対称的な energetic interaction の方向性の違いとして捉えることで原理的に説明することが可能であることを示すことである。

第1節では、まず始めに議論の出発点として Langacker (1990, 1991) の分析を検討することによって不定詞と動名詞の概念構造について考察する。第2節では不定詞と動名詞の概念化の様式の違いについて述べる。第3節では第1節、第2節の議論を踏まえて動名詞補部／不定詞補部を含む節構造のそれぞれの認知モデルを提案し、その妥当性を具体的な現象に基づき検証する。第4節はまとめである。

1. Langacker (1990, 1991) の分析とその問題点

この節では Langacker (1990, 1991) で提案されている動名詞と不定詞の概念構造の違いについて検討し、それぞれのもつ性質について考えてみる。

そこでまず動名詞についてであるが、Langacker (1991) は動名詞の概念構造を Figure 1 のように図示している。



(Langacker 1991: 26)

Figure 1

つまり、動名詞は動詞が表わすプロセスの initial-point と end-point を排除しその内部を immediate scope¹ として名詞概念化したものであり、従ってその概念構造は mass noun と同様に unbounded region² を表わしているという分析である。そして、その妥当性を(7)の文を用いて説明し、(7a) では動名詞は boundary をもつ概念としては認識されておらず、また、このように認識されているために (7b) のように複数形にすると容認不可能となると述べている。

- (7) a. Walking is very good for one's health.
b. *My cat does several sleepings every day.

そして、動名詞をこのように捉えた上で(8)のような action nominalization と

factive nominalization がそれぞれ異なる概念化の様式をもつと主張している。

- (8) a. Zelda's reluctant signing of the contract (action nominalization)
 b. Zelda's reluctantly signing the contract (factive nominalization)

つまり、action nominalization は動詞の語幹 (verb stem) を名詞概念化したものであり、その名詞概念そのものは type/instance (or token) の視点からすると type を表わしているのものであって、それが (8a) のように *Zelda's* や *of the contract* という要素が付加されることで instance となるという主張であり、この分析は (7a) の文の *walking* のように一般的な概念を表わしている場合には納得のいく説明と思われる。それに対して (8b) のような factive nominalization は目的語を含んだ VP 全体を名詞概念化したものであるためプロセス的解釈 (processual construal) をもち、instance であると分析している。従って前者は *the father of the bride* の *father* と平行的であり、(9b) のように *the* がつき得るのに対して後者は processual instance であるために (10b) のように冠詞と共起できないということになるのである。

- (9) a. *Zelda's having signed of the contract
 b. the signing of the contract (by Zelda)
 (10) a. Zelda's having signed the contract
 b. *the signing the contract (by Zelda)

それに対して、Langacker (1991) は不定詞の特徴付けとして次のように述べている。

- (11) it (=the meaning of infinitive *to*) merely suspends sequential scanning, thus deriving a complex atemporal relation that profiles all the component states of the verb it combines with. Also, attributing such a value

to the complementizer *to* itself renders more transparent the nature of its relationship to the variant that occurs in purpose clause (e.g. *He did it just to annoy her*) as well as the path preposition (*They walked to the store*). Inherent in all these notions is the *path-goal* image schema, which is even discernible in the proposed schematic characterization: the component states of a process are construable as a path leading to its completion, and—in contrast to *-ing* and some senses of the perfect participial morpheme—the infinitival *to* profiles that entire path. (Langacker 1991: 446)

つまり、不定詞の標識 (marker) である *to* と前置詞の *to* を平行的に捉え、それが経路 (path) を表わすとし、動詞によって表わされる動作の構成要素 (component states) がすべて profile されているという分析である。従ってこのことから Langacker の分析では不定詞によって表わされるプロセスは完結性を持ち、bounded region として解釈されるのに対して動名詞は unbounded region を表わすという点で対立をなしているということになる。

確かに、このように動名詞が unbounded region を表わすという議論に関しては Hayase (1996) にもこのことを支持する分析が見られる。

- (12) a. *the complete destroying of the city
b. *the total suppressing of the freedom of speech
- (13) a. *ten years' separating
b. *360 days' confing in the country jail (Hayase 1996: 256-257)

Hayase (1996) は complete や total などの形容詞は修飾される名詞によって表わされる出来事が endpoint に到達したことを含意しており、(12)が容認不可能となるのは動名詞が unbounded な概念であるからであると述べている。また(13)が容認されないのも同様にある出来事の時間的な広がり指定するためにはその

出来事が boundary をもつものとして認識されなくてはならないと主張している³。

しかし、この Langacker 分析は少なくとも次の2つの点で疑問が残る。1つ目は、action nominalization と factive nominalization ではその概念化の過程が異なっているとすると、(14)に示されるような動名詞の名詞性／動詞性の強さに段階性が認められる(柏野 1993: 211)ことはどのように説明されるのかという問題である⁴。

- (14) a. The painting of Brown
 b. Brown's deft painting of his daughter
 c. Brown's deftly painting his daughter
 d. Brown deftly painting his daughter (柏野 1993: 211)

2つ目は、次の(15), (16a)に示されるように action/factive nominalization は共に factuality をもつ読みが可能であり、また、action nominalization も processual expression としても解釈でき得るという両者に見られる共通性をどのように説明するかという問題である⁵。

- (15) a. Harvey's taunting of the bear was merciless.
 b. Harvey's taunting of the bear lasted three hours.
 c. Harvey's taunting of the bear was ill-advised.
 d. Harvey's taunting of the bear came as a big surprise.
- (16) a. Sam's washing the windows was shock to everybody.
 b. I would definitely object to your taunting the bear (should you ever decide to do it). (Langacker 1991: 32)

そして、更に言えば、次の(17), (18)は Langacker の分析の反例となるように思われる。

(17) I regret agreeing to the plan.

(18) Sightings of the UFO's made Mary nervous. (有村・天野 1987 : 123)

つまり、(17)では *agreeing to the plan* は明かに boundary をもつ事象を表わしており、また、(18)では *sightings* と複数形となっているが容認可能である。従ってこのように見えてくると action/factive nominalization は概念化の様式としてはむしろ同一であり、動名詞の名詞性／動詞性の度合は基底にあるプロセスの概念がどの程度活性化しているかという問題として捉える方がより自然であると考えられる。また、このように考えることで先に見た柏野の議論を正しく分析することができるとも言える。

では次に不定詞についてはどうだろうか。Langacker は *to* が経路を表わし、不定詞は動詞によって表わされるプロセスの構成要素のすべてを profile していると分析しているが、このことは確かに妥当性をもつと思われる。そして、この経路という考え方を更に進めて文主語の意志の向かう方向 (direction) を示していると捉えることも可能 (葛西 1997 : 41) であり、従ってこの点から伊藤 (1999) が [±volitional] という意味素性 (semantic feature) によって不定詞／動名詞のそれぞれを特徴付け、不定詞は [+volitional]、動名詞は [-volitional] という素性を内在的にもつとする分析も納得のいくことであると言える。伊藤は次の (19a-b) の容認可能性の違いに着目し、

(19) a. the possibility of John's doing the work

b. *the possibility for John to do the work

出来事が起こる可能性を問題にすることは可能であるが、動作主の意図に対してその可能性を問題にすることはできないのであり、このことがこの2つの表現の容認度の違いの原因であると述べ、動名詞がある状況を単に出来事として記述するのに対して不定詞は意図的行為を表わしていると主張している。

以下では、この方向性ということについて更に議論を深め、補部の形式を予

測でき得る原理を提示したいと考えるが、それに先立ち不定詞と動名詞のそれぞれの概念化の様式が異なるとする本稿の立場を明確にしておきたい。

2. Sequential scanning and summary scanning

Langacker (1990, 1991) はプロセスが処理される様式として次の2つのタイプを区別している。

(20) a. **sequential scanning** A mode of processing in which a series of component states are activated successively in non-cumulative fashion (i.e. a situation is followed in its evolution through conceived time, as in watching a film).

b. **summary scanning** A mode of processing in which a set of specifications or a series of component states are activated successively yet cumulatively; thus, after a *build-up phase*, all facets of a complex structure are coactivated and simultaneously accessible. (Langacker 1991: 553, 554)

(21) a. sequential scanning

$$\begin{bmatrix} [a]t_1 \\ C \end{bmatrix}_{T_1} > \begin{bmatrix} [b]t_2 \\ C \end{bmatrix}_{T_2} > \begin{bmatrix} [c]t_3 \\ C \end{bmatrix}_{T_3} > \begin{bmatrix} [d]t_4 \\ C \end{bmatrix}_{T_4}$$

b. summary scanning

$$\begin{bmatrix} [a] \\ C \end{bmatrix}_{T_1} > \begin{bmatrix} [a] \\ [b] \\ C \end{bmatrix}_{T_2} > \begin{bmatrix} [a] \\ [b] \\ [c] \\ C \end{bmatrix}_{T_3} > \begin{bmatrix} [a] \\ [b] \\ [c] \\ [d] \\ C \end{bmatrix}_{T_4}$$

(21a-b) は (20a-b) のそれぞれ概念化の様式を図式化したものであり、C は概念主体を、[a, b, c, d] は動詞によって表わされる動作の構成要素を、 t_1 から t_4 は conceived time を、そして、 T_1 から T_4 は processing time をそれぞれ表わしている⁶。そこで、このことから不定詞と動名詞の認知的な処理の過程について考えてみると、Langacker の分析では共に summary scanning であると述べられており、動名詞に関してはこれで問題はないが、不定詞についてはもう少し議論の余地があるように思われる。というのは、後で見るように不定詞と動名詞ではその統語的振る舞いがはっきり異なっており、このことに scanning における様式の違いが関与していると考えられるからである。そして、先に(11)で示した Langacker の主張を受け入れ t_0 は経路を表し、不定詞はすべての component states を profile しているとする、それは結論から言えば、不定詞の場合には summary scanning のように累積的な処理の過程をたどるというよりはむしろ、(22)に示されるように conceived time という概念を含まない sequential scanning であると考えるのがより妥当ではないかと思われる⁷。

(22) sequential scanning without conceived time

$$\begin{bmatrix} [a] \\ C \end{bmatrix}_{T_1} > \begin{bmatrix} [b] \\ C \end{bmatrix}_{T_2} > \begin{bmatrix} [c] \\ C \end{bmatrix}_{T_3} > \begin{bmatrix} [d] \\ C \end{bmatrix}_{T_4}$$

つまり、動名詞はあくまで動詞によって表わされるプロセスが summary scanning され、その結果モノ的に概念化されたものであり、先にも述べたように action nominalization と factive nominalization の違いは基底にあるプロセスの component states が semi-active な状態から inactive な状態までの度合いの違いであり、また、このように考えることで動名詞の名詞性/動詞性の段階性をうまく説明することが可能となる。一方、不定詞は動詞によって表わされるプロセスが sequential scanning され、その結果コト的に概念化されたものであり、従ってそれによって表わされる概念はいわゆる動詞的な動名詞のそれとはあくまで異なるものであると考えられる。

3. 不定詞補部と動名詞補部の認知モデル

第1節では Langacker (1991) の分析を出発点とし、動名詞と不定詞のそれぞれのもつ性質について考察し、第2節では動名詞と不定詞の認知的な処理過程の違いについて述べた。この節では不定詞補部と動名詞補部のそれぞれの認知モデルを提案し、その妥当性を具体的な現象に基づき議論する。

そこでまず、次の事実に着目してみる。

- (23) a. This watch needs repairing.
 b. This watch needs to be repaired.

ここで (23a) と (23b) の言い換え可能性から (23a) の *repairing* を受動的な意味をもつとするのは一面的であるように思われる。むしろ、この *repairing* は「修繕」という名詞的意味合いを色濃く表わしていると考えられるからである (葛西 1997: 50)。また、このような不定詞と動名詞の概念的な違いは次のような統語的な振る舞いの違いにも現われている。

- (24) a. We didn't give doing that a second thought.
 b. *We didn't give to do that a second thought. (Declerck 1991: 466)
- (25) a. She once liked watching television and physical exercise both.
 b. *She once liked watching television and to play volleyball both.
 c. *She once liked to watch television and physical exercise both.
 d. *She once liked physical exercise and to watch television both.

(小西 1980: 872)

つまり、(24)のように動名詞が間接目的語として機能し得るのに対して不定詞はそうではなく、また、(25)に示されるように目的語として同時に動名詞と名詞の両方をとることができる一方、不定詞と動名詞あるいは名詞が共起できないと

いうことは不定詞が動名詞や名詞とは明らかに性質が異なっていることを示すものである。そして、このことは先に述べたように動名詞は出来事をモノ的に概念化したものであり、それに対して不定詞は出来事をコト的に概念化したものであることを裏付ける証拠となると言ってもよい。更に付け加えれば、次の文に見られるように不連続構成素をなせるのは不定詞だけであることも注目してよい事実である。

- (26) a. John is believed to be honest.
b. *John is tragic being found guilty.

このことは不定詞がコト的な概念構造をもつためにそれが表わすプロセスの tr が Figure 2 に示されるように elaboration site (e-site) としてその概念の中に認識されており、それを elaborate する実体が John であるため、その対応関係から両者が linkage をなしていると認識されるためであると考えられる⁸。

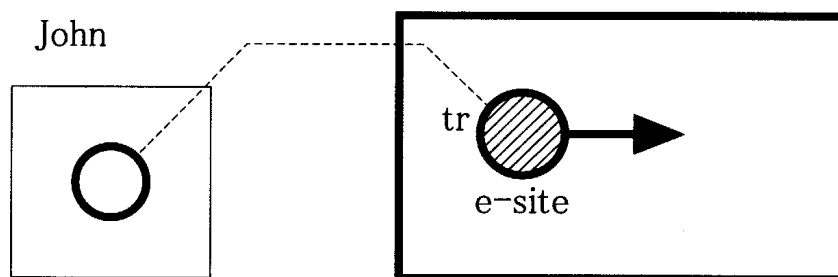


Figure 2

一方、動名詞の場合に不連続構成素をなせないのは動名詞がモノ的な概念構造をもつためにその基底にある tr としての e-site が認識されにくく両者の間に linkage が形成できないためであると考えられる。

そこで、このように不定詞と動名詞の概念化の違いを区別したうえで、小稿のテーマである S + V + O (to do/doing) という形式に議論を限定し、次の(27)のような典型的な場合を出発点として、この2つの構造の違いについて考えてみる。

- (27) a. I like to go for a walk on Sundays.
 b. I like sitting in the garden when it is fine.

この(27)の *like* は不定詞と動名詞の両方を目的語にとることができる代表的な動詞である。しかし、常にどちらも自由に選択できるわけではなく(28)のように *would* あるいは *should* が付加されると不定詞は容認されるが動名詞は容認不可能となる。

- (28) a. Would you like to have dinner now?
 b. *Would you like having dinner now? (小西 1980 : 873)

この事実は目的語としての不定詞と動名詞の違いを解く重要な鍵となると考えられる。それは *like* のように特に感情を表現する動詞の場合は、その感情の持ち方には2種類があると言えるからである。つまり、1つは、ある出来事に対してその出来事を実現したいといういわば能動的な感情であり、もう1つはある出来事によって誘発されて自然にでてくる感情である。そして、(27)、(28)の言語事実から、不定詞は前者の、そして動名詞は後者の感情を表わす標識(marker)であると仮定することができる。すると、それは文主語と補文事象との間の心的接触における抽象的なレベルでの非対称的な *energetic interaction* の方向性の違いとして捉え直すことが可能となる。

S + V + O (to do) の認知モデル

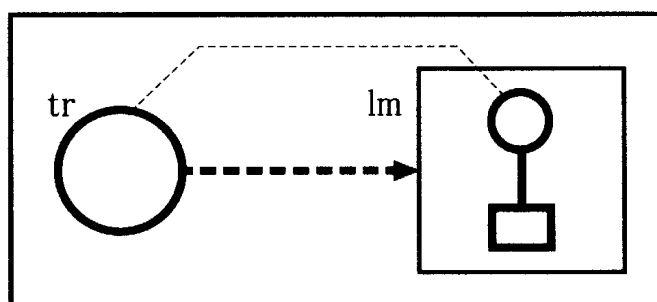


Figure 3

この Figure 3 は文主語 (tr) が不定詞補部によって記述されている出来事 (lm) に対して主動詞によって示される感情を能動的に発動していることを表わしたものである。また、この構造では文主語と不定詞の意味上の主語が一致するため、その対応関係を点線で示している。

それに対して動名詞補部をとる節構造は次のように図示することができる。

S + V + O (doing) の認知モデル

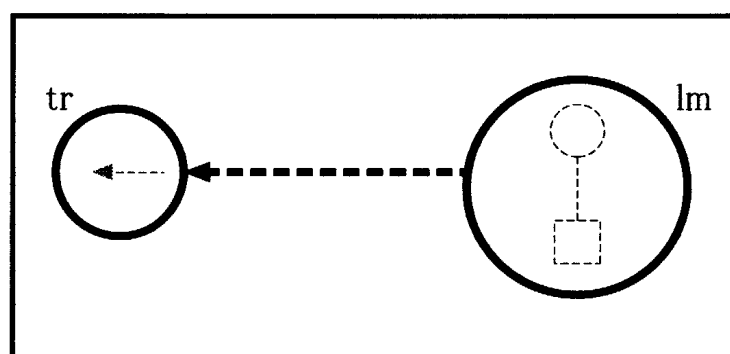


Figure 4

つまり、Figure 4 は動名詞によって表わされる概念 (lm) が刺激 (stimulus) として作用し、それが文主語 (tr) に影響を与え、その結果文主語がある感情を抱くという経験者 (experiencer) として認識されていることを表わしたものである。また、動名詞補部は基底にあるプロセスをモノ的に概念化したものであり、従ってそのプロセスが less salient であることを点線で表示することで示している。このことはよく知られているように、不定詞が特定の／個別的な出来事を表わすのに対して動名詞が習慣的／一般的な事柄を表わす (小西 1980) という性質をもつことによっても裏付けられる。また、このように考えると動名詞それ自体はプロセスをモノ的に概念化した実体 (entity) であるというだけで、その意味上の主語が主節の主語に一致するかあるいはそれ以外の一般の人を指すのかという議論はむしろ二次的にでてくる問題であると考えられる。更に言えば、しばしば指摘される問題として、動名詞が過去指向性を有するか否かということも Figure 4 から、動名詞そのものはその概念内容が tr にある感

情を引き起こさせ、あるいはその結果としてある行為を促すということのみを表わしており、それが過去指向性をもつかどうかはこの認知モデルに特定の述語が elaborate された節構造全体から結果としてでてくることであると考えられる。

以下ではここで提示した認知モデルがある程度妥当性を有するものであることを、特に感情動詞を中心に具体的な現象を取り上げ検討していく。そこで、まず、hate, regret, doubt を例にとると、

- (29) a. I hate speaking ill of others.
 b. John regrets telling you that story.
 c. I doubt being able to finish it in time.

(29)では確かに動名詞によって表わされている事柄が文主語に影響を与え、嫌悪感や後悔また、不安感などの感情を抱かせていると考えることができ、Figure 4 のモデルに合致しているため、動名詞補部をとっていると考えられる。

それに対して、次の(30)では主語が（能動的に）動詞によって示される感情を発動させていることが明確に示されている。

- (30) a. I hate to break the news to her.
 b. We regret to inform you that you are to be dismissed next week.

つまり、(29a-b)とは異なり、(30a)では、不定詞で述べられている事柄に対して嫌悪感を表明しているのであり、(30b)は that 節で述べられている事柄を伝えるという行為を残念だという気持ちを込めて行うということが述べられている。また、このような視点からすれば、dislike が like とは異なり、動名詞を補部にとるが不定詞とは共起しにくいことも予測可能となる。

- (31) Mary dislikes plucking chickens.

なぜなら, *dislike* は 'not enjoy,' 'not be fond of,' 'find unpleasant' (Declerck 1991: 510) という意味であり, (31)は *plucking chickens* という事柄が *Mary* に *dislike* という感情を抱かせているということを表わしているからである。更に付け加えれば, 同様に考えることでなぜ *appreciate* が動名詞補部のみを取るのかも理解できる。

また, 同様に *fail* が不定詞補部とは共起するが動名詞補部とは共起しにくいということも自然に説明がつく。

- (32) a. He failed to see the truth.
b. He failed to follow our advice.

つまり, *fail* は (32a) のように「努力」「試み」を含意し, そうした努力にも関わらず不定詞節で述べられている事柄が不首尾に終わることを意味する (小西 1980: 532) のであり, その事柄に対する主語の能動的な働きかけが意味の中に含まれているのである。このことは (32b) のように不定詞節で述べられている事柄を意識的に拒否するという主語の能動的な態度からも明かである。また, 更に言えば, 否定形式である *never fail to* が意志的な行為を表わしているということもこのことを支持するものと考えられる。

更に, ここで提示した認知モデルから *mind* がなぜ動名詞補部のみと共起するのかについても同様の説明が可能である。

- (33) Would you mind my opening the window?

つまり, (33)は *my opening the window* という事態が *you* に *mind* という感情を引き起こすかどうかを問うているのであり, Figure 4 のモデルとは合致するが Figure 3 のモデルに対応する読みをもたないため, 動名詞補部のみをとるのである。

また, 更に Figure 4 の認知モデルは Declerck (1991) の次の記述からも支持

が得られる。

- (34) The gerund is used when the speaker expresses that he enjoys (or does not enjoy) a particular kind of situation, or that he finds (does not find) a situation of that kind satisfactory or pleasant.

The gerund is also used to express that one finds a present situation enjoyable (pleasant, satisfactory). (Declerck 1991: 508-509)

- (35) a. It is raining. Shall I give you a lift? --- No, I like walking in the rain.
b. I love visiting this place. It stirs a lot of memories. (ibid)

(35a-b) では動名詞によって表わされている事象が主語 (*I*) に *like* や *love* という感情を引き起こさせているのである。

また、このような視点に立てば、次の(36)のように感情動詞以外の *avoid* などある種の動詞がなぜ動名詞補部とのみ共起するのかを説明する糸口を見い出すこともできると考えられる。

- (36) I avoided meeting John.

というのは *avoid* は ‘to escape, evade (things coming to wards one)’ という意味であり、認知的にはやはり Figure 4 に似た構造をもち、そのために補部が動名詞となっていると思われるからである。つまり、そのままの状況では *meeting john* という事態が主語にやってくる (起こる) ことになるが、何らかの理由が主語にある感情を抱かせ、その結果その事態を回避するという行為を主語に引き起こさせたと考えることができる¹⁰。この点で *avoid* は補部の事象が起こらないということでは同じであるが、不定詞補部を取る *refuse* とは明確に異なるのである。

以上、これまで、不定詞補部と動名詞補部の違いについて考察し、文主語(tr)

と補部によって表わされている事象 (Im) の間にある非対称的な energetic interaction の方向性の違いから補部の形式を原理的に予測することが可能であることを主張した。そして、文主語が補部の出来事に能動的に働きかける場合には不定詞によって、逆に補部によって表わされる事象が刺激となり、それに影響を受け、その結果文主語にある感情を抱かせたり、特定の行為を促したりする場合には動名詞によって言語化されるという分析はある程度妥当性を有するものと考えられる。

しかし、この接近法にも一見反例となるものもあることは確かである。たとえば、先に挙げた(5)は明かに主語が補文の事象に対して能動的な働きかけをしていると考えられるが、動名詞補部と共起している (ここで(5)を(37)として繰り返す)。

- (37) a. She recommends buying the big tins.
b. He suggested reading the instructions first.
c. John advised consulting a lawyer.

そこで、(37)をもう一度観察してみると、この場合、なぜ動名詞補部を取るのかということはこれまで述べてきたように動名詞がモノ的な概念化の過程をとるということと関係がある。つまり、動名詞によって表わされている概念はそれだけ客体化された概念として認識されていることを表わしており、そのため文主語とは独立的に存在する概念を表わし得るのである。(37)はまさにその例であり動名詞の表わす行為の主体は文主語ではなく、従って Figure 3 の認知モデルと一致しないために不定詞と共起しないと考えることができる。この点で(38)のように *propose* が不定詞補部をとると「～するつもりだ」という意味であるのに対して動名詞補部をとる場合には「提案する」という意味をもつことはここでの分析を支持するものと言える。

- (38) a. She proposed to catch the early train.

- b. I propose waiting till the police get here.

また、(39)の *mean* も同様に不定詞補部をとる場合は「意図的に～しようとする」という意味であるのに対して、動名詞補部の場合は「ある事がある事柄を引き起こす」という意味に解釈されることもここでの議論が的外れではないことを示している。

- (39) a. We mean to observe the rules.
 b. Putting in a new window will mean cutting away part of the roof.
 c. This illness will mean (your) going to hospital.

4. まとめ

小稿では不定詞と動名詞の概念化の違いについて考察し、S + V + O (to do/doing) という形式に議論を限定し、不定詞補部と動名詞補部の選択を原理的に予測でき得るモデルを提示した。要点を繰り返すと、不定詞と動名詞ではその概念化の様式が異なっており、前者が sequential scanning されコト的に認識されているのに対して後者は summary scanning されモノ的に認識されていることを主張し、そのために動名詞が不定詞とは異なり客体化された概念を表わし得ることを述べた。そしてこのことが、(37)の補部の選択に関与していることを論じた。また、不定詞を目的語にとる節構造と動名詞を目的語にとる節構造ではその認知モデルが異なっており、前者の場合には、たとえば I want/hate to go shopping this afternoon. のように文主語が不定詞節によって表わされている出来事に対して能動的に「～したい／したくない」という感情を発動しているのに対して、後者の場合は非対称的な energetic interaction の方向性がむしろ逆向きに作用しており、文主語が動名詞によって表わされる事象によって影響を受け、ある感情を抱くということを表わしているものであることを述べ、その妥当性を具体的な現象に基づき論じた。

本稿では議論の都合上、述語動詞が *begin*, *finish* などの相動詞 (aspectual verbs) の場合や主語位置における不定詞／動名詞の意味機能、また S + V + O (to do/doing) 以外の構造については議論を避けてきた。したがって、このようなことが説明されなければ不定詞や動名詞の概念構造を完全に記述したことにならないことは明かであるが、小稿で提案した認知モデルが不定詞補部と動名詞補部をある程度原理的に予測できるという意味で妥当性を有するものと考ええる。ここで、残された問題については今後の課題として更に考察し、改めて議論することとしたい。

注

1. ここで immediate scope とは次のように定義付けられる概念である。
 - (i) **Immediate scope** When scopes are nested one within another, the immediate scope is the innermost layer, the one immediately relevant at a given level of organization. A predication's profile is a kind of focal point within its immediate scope. (Langacker 1991: 549)
2. Langacker は bounded/unbounded region について次のように述べている。
 - (i) The fundamental distinction between count and mass nouns depends on whether the profiled region is construed as being bounded within the scope of predication in its domain of instantiation. For physical substances, the domain of instantiation is generally space. *Lake* is thus a count noun because it designates a limited body of water whose boundaries are specifically included in the scope of predication. By contrast, *water* is a mass noun. Though instantiated in space, *water* is not intrinsically bounded in this domain.
(Langacker 1991: 18)
3. Hayase はこのことについて次のように述べている。
 - (i) ... action nominals focus their scope on the event's internal structure, excluding its boundaries. (Hayase 1996: 255)

また, deverbial nominal と action nominal に関してその性質の違いについて述べ, 次のようにも指摘している。

- (ii) Moreover, in the *OED* there is a description of the semantic difference between these two types of nominalization. Action nominals are “nouns of continuous action or existence” and “imply indefinite duration without reference to beginning or end (*OED*: s.v. *ing*²).”

(ibid)

4. この問題に関しては Ross (1973) でも指摘されており, 次のような Nouniness Squish を提示し, 詳細に議論している。

- (i) Nouniness Squish:

that > for to > Q > Acc Ing > Poss Ing > Action Nominal
> Derived Nominal > Noun

また, このことから第2節, 第3節で議論するコト的概念化とモノ的概念化という区別は支持が得られる。

5. このことに関して Langacker は manner, duration, property, factuality が認識され得るのは nominalization の場合だけでなく party のような un-derived noun にもおこりうることを指摘している。

- (i) a. The party was boisterous.
b. The party lasted three hours.
c. The party was ill-advised.
d. The party came as a big surprise. (Langacker 1991: 33)

6. conceived time と processing time とはそれぞれ次のように定義される概念である。

- (i) **conceived time** Time as an object of conceptualization. The component states of a process are distributed along this axis.
(ii) **processing time** Time as a medium of conceptualization, an axis along which cognitive activity takes place.

(Langacker 1991: 546, 551)

7. 不定詞の概念化の様式をこのように仮定することで *cease to do* が「(次第に) ~しなくなる」という読みをもつことも自然に説明できると考えられる。
8. このことに関係することとして Langacker (1990) は次のように述べている。
- (i) When there is a clear asymmetry between two predications along the lines of conceptual autonomy/dependence, it is natural for the dependent structure to function as profile determinant, as it canonically does. This is quite consonant with its function of organizing a scene, of establishing relations among schematically specified entities; the autonomous structure simply fits into this scene and elaborates one of these entities. (Langacker 1990: 174-175)
9. このことに関係することとして Izutsu (1999) が Location-subject constructions について議論し、次のように述べているのは興味深い。
- (i) Mental states also manifest themselves in location-subject constructions. The sentences in (1), for example, denote 'know,' 'like,' and 'be confident,' respectively. These states of mind consist of a mental entity ('idea,' 'pleasure,' and 'confidence') and an experiencer (animate entity which undergoes the state of mind).
- (1) a. I have a good idea.
b. He cannot do all as he likes.
c. *Kare-ga zisin-ga na-i-no-ga*
He-NOM confidence-NOM absent-NONP-COM-NOM
'(I) found he did not have confidence (in it).'
wakat-ta.
find-PAST

The experiencer is conceived of as a location where the mental entity occurs or lies. This is corroborated by the fact that the experiencer

nominals are marked as locative-dative in the related constructions.

10. このような考え方は Imai et al. (1995) から支持が得られる。

(i) In (1a), standing on his hands is the primary goal that John attempted to achieve, though the sentence suggests that his attempt was not successful. (1b), on the other hand, John actually did stand on his hands, but his doing so is not presented as his primary goal. It is rather presented as a means by which he tried to achieve a different goal, that of getting Mary's attention.

(1) a. John tried to stand on his hands.

b. John tried standing on his hands (to get Mary's attention).

(Imai, K. et al. 1995: 124)

つまり、(1a) では *to stand on his hands* が goal として認識されているのに対して、(1b) では *Mary* の注意を引くという理由が *John* に *standing on his hands* という行為を引き起こさせたのである。

References

- 有村兼彬・天野政千代. 1987. 『英語の文法』英語学入門講座 第8巻 英潮社
新社.
- Declerck, R. 1991. A Comprehensive Descriptive Grammar of English.
Tokyo: Kaitakusha.
- Imai, Kunihiko. et al. 1995. *Essentials of Modern English Grammar*.
Tokyo: Kenkyusha.
- Izutsu, Katsunobu. 1999. 'Location-subject constructions.' 『文化と言語』
札幌大学外国語学部紀要, 第50号
- 伊藤梨恵. 1999. 「不定詞補部と動名詞補部の統語的振る舞いと意味的差異について」
Studies in Linguistic Semantics, Sapporo University Linguistic
Circle.
- Hayase Naoko. 1996. "On the Interaction of Possessive Constructions
228

- with Two Types of Abstract Nominalization: A Cognitive Viewpoint.”
English Linguistics, 248-276.
- Hudson, R.A. 1971. *English Complex Sentences An Introduction to Systemic Grammar*. Amsterdam • London: North-Holland Publishing Company.
- 葛西清蔵. 1997. 『英語学演義』 共同文化社.
- 柏野健次. 1993. 『意味論から見た語法』 東京：研究社.
- Kiparsky, Paul, and Carol Kiparsky. 1971. “Fact.” In Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics*, 345-367. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小西友七. 1980. 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社.
- 黒宮公彦. 1997. 「動名詞と to 不定詞の相違について」『京都大学大学院英文学研究会』.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- _____ 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2. Stanford: Stanford University Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. London: Longman.
- Ross, John R. 1973. “Nouniness”. O. Fujimura ed. *Three Dimensions of Linguistic Theory*. Tokyo: TEC Company, Ltd.. (安井稔編集. 1975. 『海外英語学論叢』 東京：英潮社)
- 安井稔. 1974. 『英語学の世界』 東京：大修館.
- 吉田正治. 1995. 『英語教師のための英文法』 東京：研究社.